

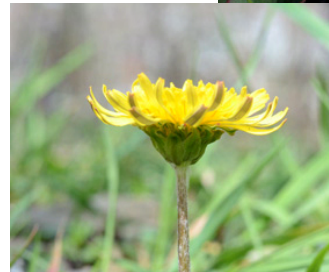
今年は花の季節がちょっと遅めです。博物館のおとなりの樹林では、例年、ゴールデンウィークに入った頃には花が終わっているフデリンドウが、まだたくさん咲いています。しかも、遊歩道が整備されて3年目の今年は、明るくなった林床で個体数も増え、フデリンドウの楽園のようです。今回はフデリンドウをはじめとした春の花と、コナラの木についているいろいろな虫を観察します。

◆可憐な春植物 フデリンドウ

高さは6、7センチにしかならない、典型的な春植物です。春植物とは、花が終わって結実すると、地上部が消えてなくなってしまう植物のことです。毎年4月初旬から中旬にかけて咲きます。かつては明るい雑木林にふつうに見られましたが、林床が管理されずにヤブになったり、常緑樹の暗い林になったりすると消えていってしまいます。そのため現在、相模原市内では里山の管理がされている場所などに残る貴重な植物となってしまいました。ただし一年草で発芽率は良く、環境条件さえ合っていればたくさん増えていきます。



フデリンドウ



カントウタンポポ

◆在来のタンポポ カントウタンポポ

留保地のフェンス内に咲いているのは、ほとんどがカントウタンポポです。最近、セイヨウタンポポとの雑種が増えて市内でもいたるところで見られますが、この場所に咲いているものは、花粉を顕微鏡で検定するなどして、雑種でないことが確認できています。ただし、博物館の駐車場に咲いているものは、雑種です。総苞（花の受け皿の部分）のちがいをみてみましょう。

◆葉っぱを丸めたのは誰？

博物館のまわりにあるコナラやクヌギの葉をよく見てみると、葉の先の方がくるくると上手に丸められています。さて、誰がこんなことをしたのでしょうか。

答えは、ヒメクロオトシブミという昆虫です。成虫のメスは、口を使って上手に葉を切って丸め、その中に卵を産み付けます。このへんな丸まったものは、ヒメクロオトシブミのゆりかごだったので！

卵からふ化した幼虫は、このゆりかごの内側を食べて成長し、さなぎになります。さなぎから羽化して成虫になると、ゆりかごを食い破って初めて外の世界に飛び出します。

写真右上) ヒメクロオトシブミの成虫 左上) クヌギの葉先の巣
下) 巣を分解したところ。矢印の先に長さ1mmほどの卵があります。



次回のお知らせ

ミニ観察会拡大版！：5月27日（日）11時、13時、14時、15時（各回30分）
新聞 No. 14 も拡大版で発行します。